

AA 研共同研究プロジェクト

『マルセル・モース研究－社会・交換・組合』平成 19 年度第 3 回研究会

日時 2007 年 10 月 20 日（土）午前 10 時より午後 5 時 30 分まで

場所 AA 研セミナー室（301 室）

内容

1. 関一敏（九州大学）
「呪術論訳稿の呈示と概説」
2. 高島淳（AA 研所員）
「供犠論訳稿の呈示と概説」
3. 渡辺公三（立命館大学）
「贈与論訳稿の呈示と概説」
4. 泉克典（立命館大学大学院生）
「エスキモー社会論訳稿の呈示と概説」

1. 呪術論訳稿の呈示と概説

第一期(1899-1914)のモースの仕事の三本柱のうち、当面「呪術」に焦点をしばって話をすすめる。また前回、「呪力の起源」(1904 年)の問いの構成から三つの課題 [(1) 社会的なるものと社会的なるモノ, (2) 半分の真剣さ, (3) 人物像・人格・人となり] を析出したのだが、今回の報告は、このうち(1)にかかわる。すなわち、呪術者のもつ骨・小石・水晶は呪力のモノ化であり、これを介して呪術者はその職能性をたもつ。この民族誌的事実をふまえてモースの呪術論の要は、呪術の社会的次元とモノの次元を往還しながら個々の呪術者がその個性をあらわにする、とみる視角にあった。これにかかわる適切な訳語の選択をふくめて、大小の課題は次のとおりである。

- 1) マナを想定した「呪力」の概念。
- 2) モノ化された呪力を意味する **substance** をモノあるいは実質と訳すが、アリストテレス流には「形相」にたいする「質料」であり、かたちをとらない何かを示唆する。
- 3) 同年刊行の二つの呪術研究(『素描』と「起源」)の配置関連は未詳である。前者に濃密な精神病理学との対比は後者にはない。
- 4) 用語のキリスト教的制約(啓示, 発出, 祈り等)をふくめて、ユダヤ系の著者とキリスト教との遠近法。

最後に 5)として、全体的な課題であるが、モースのモノへのこだわりは、社会的次元ばかりでなく、身体的次元と魂の次元におよび、民族誌的細部への忠誠の源泉ともなる。この「戦略的フェティシズム」(渡辺公三)の可能性を考えたい。 (関一敏)

2. 供犠論訳稿の呈示と概説

「供犠論」の全訳を提示する予定であったが、所用が立て込んだため、第一章「定義、および供犠の体系の統一性」の呈示に留まった。

最初に定義するものが「供犠者」であることが、インドの供犠観念にモデルを取る

という方法論的選択をあらわにしている。通常の供犠の観察者にとって、血なまぐさい犠牲の執行者の方が目に飛び込んでくるものであるが、供犠の執行の本質的主体が、経費を支払い生贄の動物を提供する存在の方であって、その主体にこそ供犠の結果としての恩恵などが返ってくることで、このことが「供犠者」をインドのヤジャマーナと同様に定義することによって明確にされる。

同様に供犠の分類についてもドイツ的な観念論的分類を取らず、「日常的」と「機会次第」というインド的な実践論的な分類にならうことによって、供犠の体系の表面的な多様性の背後にある本質的な統一性に迫ることができるとされる。

訳語の問題として、旧約聖書やユダヤ教の用語について、新共同訳のようなものに準拠することが望ましいのか、検討すべき点はまだ多いことも示された。（高島淳）

3. 贈与論訳稿の呈示と概説

前回に引き続き「贈与論」の第Ⅱ章の訳稿の検討をおこなった。当初第Ⅱ章本文全体の訳了を目指したがそれは果たせなかった。この章の重要性を再確認するために構成を示す。章題は「この体系の広がり：物惜しみのなさ、名誉、貨幣」であり、節として、Ⅰ気前のよさという規則：アンダマン、Ⅱ贈り物の交換の原理、理由、強度(ニューカレドニア、トロブリアンド、その他のメラネシア諸社会)、Ⅲアメリカ北西海岸：名誉と信用、三つの義務：与えること・受け取ること・返すこと、ものの力、名声の貨幣、最初の結論、から成っている。これでも明らかなおりマリノフスキーの「西太平洋の遠洋航海者」とボアズ等のアメリカ北西海岸のインディアン諸集団の報告に依拠して、第Ⅰ章で概念を提示した”*prestations totales de type agonistique*”の民族誌的記述の裏づけを試み、次章の西欧古典にもとづく分析へと接続するための「最初の結論」を引き出す「贈与論」全体のなかでも要となる章である。1920年代の同時代的なブラウン、マリノフスキー、ボアズおよびモースの後継者レナールの資料をどのように解説し、民族誌の記述の重点の布置をどう再編しているのかをみきわめることが、民族誌文献学者としてのモース理解のポイントとなろう。したがって依拠する民族誌との厳密な対照研究が必要である。第二期『年報』第一巻（「贈与論」掲載号）のモースによる大量の民族誌評との関連も見逃せない。用語としてクラのパートナーを *associe* と呼んでいる点など注意すべきであろう。（渡辺公三）

4. エスキモー社会論訳稿の呈示と概説

今回の研究会では、「エスキモー社会」論の試訳（序、第3～5章）を提示し、基本的訳語の調整を図るとともに、文体・用語系と、論文の背景をなすいくつかの文脈の検討について、今後取り組むべき課題を示すことを目的とした。

この論文には、年報派の社会学構想の一端を占める社会形態学について、その視角の有効性を検証するケーススタディという位置付けがある。そのため、文体面・用語系からいっても、同時期におけるモースの他の研究とやや印象を異にする。

このことを念頭に置き、同時期のモースの研究、および後年モースの展開する研究テーマとの接続関係を明らかにするために、以下の数本の補助線を引いた。提示したのは主に、①ドイツにて展開したラッツェルの人類地理学・政治地理学（そこからの

異端的展開としてのボアズを含め)のアプローチからの継承・対抗関係, ②本論文の直接の下敷きとなった高等研究院の演習における, デュルケムの家族論を下敷きとしたエスキモーおよび北米社会のトーテミズムおよび社会組織についての, 論文の網羅的検討作業の内実, ③後年の文明論への展開(文化という用語の少なさ, 文明という用語の多用)の3点である。

以上を踏まえ, 訳注という形に最終的に結実させるための今後の課題として, 以上の文脈を検証のうえ, そうした背景の影響を, エスキモー論文の文体や具体的な用語系に分け入って対応関係をつけていく必要がある。また, モースの社会学・人類学構想における形態学的視角の消長を今後, 他のテキストとの参照関係を考慮のうえ検討する必要もあり, 今後両面の作業を並行して進めなければならない。(泉克典)